

## 6 旧日本軍が北陸山中に封じ込めた巨宝（福井県）

ぼくがトレジャーハンティングを始めた昭和四十年代の末ごろ、ターゲットにされるものというところ、日本三大埋蔵金の徳川幕府御用金、太閤秀吉の黄金、結城晴朝の財宝をはじめ、武田信玄や佐々成政の軍用金、大久保長安の隠し金など、戦国時代から江戸初期にかけての人物に関連するものが中心だった。時代的に最も新しい幕末の徳川幕府御用金などは、かなり生々しく感じられたほどである。

ところが、平成に入ってからまもなく、あるジャンルの伝説がにわかに台頭してきて、探索者たちの眼もそちらへ向くようになった。太平洋戦争の末期から終戦直後の混乱の中で、旧日本軍が海外から持ち帰った貴金属その他を、処分に困って隠したり廃棄したりしたものだ。

実際に、終戦直後の昭和二十一年四月には、東京都江東区越中島の運河で、すごいものが見つかっている。旧日本軍がセレベス島（インドネシア、当時オランダ領）から持ち帰り、米軍に接収されるのを惜しんで沈めておいた五十四トンの金塊、十三・五トンのプラチナ塊、五トンの銀塊で、当時の価格で三百七十億円、いまだつたら三千億円を超えるお宝だ。秘密を知る旧日本兵がGHQにタレ込み、アメリカ人ダイバーが引き揚げた。

映像も残されているので、見つかったのは紛れもない事実だが、その後これがどうなったかは謎で、日本政府に返還され、日銀の倉庫に収められたことになっているが、国会で取り上げられて大きな話題にはなったものの、真相はわからずじまい。関係者とみられる人物が変死したり、所有権を主張する者が現れたり、M資金のネタにされたり、騒ぎはずっと後まで尾を引いた。

また、旧日本軍関係では、当時もフィリピンのヤマシタトレジャーが世間を賑わせていた。日本陸軍第十四方面司令官の山下奉文大將率いる日本軍が、ルソン島の山中で全面降伏する前に、島内に隠したといわれる財宝のことで、数十人の日本人が現地で探索に関わっていて、ぼくも複数の人から誘われたことがある。

ほかに、日本国内の数カ所に、それぞれ事情や経緯の異なるものがあるという話を耳にしていた。北海道美幌町、新潟県柏崎市、京都府舞鶴市などだ。そういった話が急に浮上してきたのは理由がある。秘密を握る生き証人がいるものの、年齢的にぎりぎりのところに来ていたからだ。本人が自ら調査に乗り出すケースもあっただろうし、周りの者が生の証言を頼りに動き出した例もあるだろう。

もしぼくが金目当てだけでトレジャーハンティングをやっていたのだらしたら、この種の話に飛びついたかもしれない。実績を上げるにはきつとそれが早道だ。これまで出会った人の中で唯一実績をもつ仲元虎齋氏も、旧日本軍が台湾の基地に隠していた金塊を発見した人だった。

だがあいにく、当時のぼくは戦中戦後の話にはまったく関心がなかった。第一、バックグラウンドがブラックすぎて、ロマンが感じられない。また、消えてからたかだか五十年たつたかたないようなものを回収するのは、単なる土木作業かサルベージでしかない。ぼくが狙ってきたのは、天草四郎の財宝や徳川幕府の御用金、戦国武将の軍資金など、どちらかといえば、あるかどうかわからない、いや、むしろふつうの人は実在を否定するような伝説上のお宝ばかりだ。だからこそ、掘り出してみせて、「ほうら、あったよ」と、周

りを驚かせたいというのが最大の動機になっていたのである。

ところが、二十年以上買ってきたその主義を、一九九七年の暮れに突然かかってきた一本の電話をきっかけに、変節することになった。

そのころ、埋蔵金の件で知らない人から電話がかかってくるのは、けっして珍しいことではなかった。ぼくはほかの多くの探索者のように、秘密を漏らさないようにこそ探すのではなく、逆に人前で堂々と喋るし、進展の様子を新聞や雑誌に発表するし、マスコミの取材もウエルカムだったから、いろいろな人からコンタクトがあり、そのおかげで新しい情報も入るようになった。

師と仰いだ日本の埋蔵金研究の権威、はたけやませいこう 島山清行氏は、埋蔵金の情報を求めてくる、欲だけに取り憑かれた人にずいぶん悩まされていたらしいが、ぼくの場合は、情報や物証の収集とその分析を得意とする畠山先生とは少しちがって、トレジャーハンティングを楽しく実践する態度を鮮明にしていたからか、借金で首が回らなくなった人が神頼みのように訪ねてくるなんていうことはなかった。それでも、中には話がまったくかみ合わない人とか、あまりお近づきになりたくない危険な臭いのする人物もいたから、かなり警戒はしていた。

その電話がかかってきたときも、声の様子では相手はけっこう年配の男性と思え、歓迎すべき話ではないような気がして、うわの空で聞いていた。あとで記憶の底に残っていたのは、ターゲットが旧日本軍が関係したものであることと、長い間探索に打ち込んできたが、歳をとってきたため家族が心配し、代わりにやってくれる人を探していたところ、息子さんがぼくの著書である『日本の埋蔵金』の「話」を見つけて、出版社に問い合わせ、ようやく連絡先がわかったから電話をかけてきたということくらいだった。おぼろげながら覚えていたのは、探索地がずいぶん遠いところだったことで、いづれにしろ協力もアドバイスもできそうにないと思ったものの、それをはっきり伝えたかどうかともあいまいだった。

すると数日後、大きくて分厚い郵便物が届いた。差出人の住所が首都圏になっていたのは意外だったが、Tさんの名前は記憶にあったから、急いで開封すると、中に入っていたのは四百字詰め原稿用紙十五枚を二つ折りにして束ねた「調査書」と、クリアファイルにきちんと整理された現場の写真だった。「調査書」の文章はちよつと読みにくかったものの、きれいに並んだ楷書の文字や製本の仕方などに、送り主の几帳面な性格が表れていた。(とんでもないものを受け取ってしまった)

それが正直な感想だった。真実味にあふれるその内容もさることながら、Tさんがたどってきた長い苦闘の日々に、心を動かさずにはいられなかったのである。

昭和十五年に福井県の敦賀港に凱旋帰国した船に積まれていた戦利品は、敦賀連隊の司令部に保管されていたが、十九年になり、本土爆撃によって失われるのを避けるため避難させたというのだ。避難場所は二カ所で、うち、海の近くの集落に埋蔵されたものは、昭和三十年ごろに掘り出されているが、山中に隠されたものがまだ見つかっていない。

この情報の発信元は、地元有力者の家に下宿していた連隊の将校だから信ぴょう性は高い。さらに、Tさんは昭和三十年代に調査グループに請われて途中から仲間に入り、標高約八百メートルの山中で、まず軍の施設があったと思われる平坦な土地を探り当て、次に

地面に斜めに突き刺さった腐りかけの天秤棒てんびんぼうの先端が指し示す場所に、人工的に掘削された後に埋め戻されたトンネルを発見しているのである。当初は、埋蔵が事実であったとしても、秘密を握る者が、世の中が落ち着いたところに回収に来ているはずで、探すのは無駄だと考えていたTさんだったが、回収したあとのトンネルをまたご丁寧ていねいに埋め戻すことはないだろうから、ここはまだ手つかずであると確信した。

その後、断続的に数回にわたって調査を実施。最後の探索が十年ほど前のことで、すでに最初のころからの仲間は何界し、残るは自分一人。身内のほかに秘密を知るものはいないという。

年が明けて一週間ほど過ぎたころ、Tさんはわが家の近くの喫茶店へやって来た。ここはトレジャーハンティング関係者との面談にちよくちよく利用するところで、問題ないと判断すれば、二回目以降は自宅に来てもらうが、怪しげな人は絶対自宅には招かないことにしていた。少し前の夏、手土産に大きなスイカをぶら下げてやってきたY氏とも、ここでしか会っていない。結城で最初に出会ったY氏は、ほくよりだいぶ年上だったが、不動産の売買で儲けた四億三千万円を元手に財宝探し専門の会社を立ち上げ、全国の有力伝説地を片っ端から重機で掘りまくり、資金のすべてを使い果たしたうえに、数千万円の借金までつくった御仁だ。伝説の内容をろくに分析もせず、ただ大規模に掘りさえすればどこかでお宝に当たるといこうという、信じられないほど安易な考えでもって散財をした。

この世界にはこれに類似する人物がけっこう多い。ただ、Tさんの場合は、事前に送られてきた資料のこともあり、ほとんど警戒はしていなかったと思う。想像していたとおり、相手は物腰の柔らかい紳士で、とても血眼になって巨額の財宝を追いかけている人には見えなかった。七十六歳、海軍での戦争体験もあり、終戦間際にロタ島沖で米軍に拘束され、グアム島で捕虜生活を送ったという。探索グループの最後の生き残りだ。

詳しい説明を聞き、会話を進めるうちに、Tさんを駆り立てているものがけっして欲ではなく、偶然関わることになったこの一件の真相を、なんとしても突き止めたいという探求心だということがはっきりわかった。

さて、本題のほうだが、送られてきた「調査書」の補足説明を聞きながら、ぼくが疑問点についてただすという形で面談を進めていった。もともとは鉱山技師だったTさんが、調査対象地域の山々を知り尽くしていることから、請われてグループに加わったことから始まり、山中の駐屯地跡の発見、用を足そうと思っただけ偶然に足をのせた岩がなんとなく不自然だったことで、ひっくり返してみたら発破をかけた跡があり、それがトンネル発見のきっかけになったこと、埋め戻された土砂を取り除いていくうちに、昔の軍服につけられていた竹製のボタンなどが出土したこと、トンネルの規模は立て坑や斜坑も含めて総延長三十メートルほどで、ほぼ最終地点まで到達していること、その途中のどこかに、輝緑凝灰岩きりよくぎようかいがんという丈夫でありながら比較的掘りやすい緑色の岩石の層をくり抜いて、四畳半程度のスペースの宝庫が造られ、入り口を塞いであると考えられることなどが滑らかに語られた。

Tさんは、もちかけられた話を鵜呑みにするのではなく、自分なりに裏を取っている。ぼくも伝説の真偽しんぎを分析するときに「5W1H」に照らし合わせて、齟齬そごや矛盾のないストーリーが成り立つかどうかを考える。いずれも重要な要素なのだが、あえて最も大事なことを一つだけあげるとすれば、「WHAT」、つまり「何を隠したのか」、いいかえると「隠すようなものがほんとうにあったか」である。Tさんもそれが気になり、昭和十五年

に凱旋帰国した船の積荷について、当時憲兵をしていた義兄に聞いたところ、「確かに相当なものを持ち込まれた」という証言を得ている。しかも、貴金属のほかに、おびただしい数の美術工芸品、たとえば材質は不明だが唐獅子カラシの像などがあつたことがわかっている。また、二カ所のうち発見された一カ所についても調べを進め、場所、品目と数量、発見者の名前も判明しているという。

「情報源の将校は、戦後、郷里に帰ってすぐに亡くなってますし、埋蔵工事に直接関わってはいなかったので、場所は知らなかったんですね。だから、最初のグループは何年たってもそこへ行き着けなかった。私は最初は半信半疑、というよりおおいに疑っていて、まあしばらく付き合っただけであがるかっていう軽い気持ちだったんですが、その場所を見つけたことで心境が一変しました」

というTさんの言葉に引きずられるように、ほくも次第にこの一件にのめり込んでいった。

「昭和十九年の埋蔵当時でも、三億円相当のものだったそうですよ」

「ほう」

当時の三億円がいかほどのものか、ピンとこなかったが、かなり高額であることは確かだ。ほんとうにあるものならばぜひ見みたい。しかし、金銭的な価値よりも、すぐに思い浮かんだのは、これが日中戦争当時の略奪品だとしたら、相手国に返還すべきではないかということだ。終戦から半世紀以上が経過し、激動の二十世紀も終わりに近づいている。これを探し出したら大きな話題になるだろうし、つべこべいわず返還すれば、いまだに戦後処理をやり残している日本に対し、近隣諸国からの風当たりが少しは弱まるのではないだろうか。

「とにかく一度、現地へ案内していただませんか」

ほくが頼むと、相手は当然のこととばかり大きく頷いて、

「雪が解けてからですね。四月の中旬くらいにしましょう」

と提案した。なにしろ行ったこともない土地だから、スケジュールは相手にまかせるしかない。三カ月以上もあとのことだ。その間に、ほくは手元に置いたままの「調査書」にもう一度じっくり目を通し、十年前の最後の探索まで、約三十年にわたって続いたTさんの苦闘のあとをなぞることにした。

調べてみたら、平成十年当時の物価指数は昭和十九年に比べて六百倍以上になっている。ということは、眠ったままの財宝は時価約二千億円。ほくにとって非現実的な数字であることはもちろんのこと、ただそれだけの値打ちがあるというだけだということもわかってきた。

Tさんの案内で初めて現地へ向かったのは、一九九八年四月中旬のことだった。ほくの車の助手席にTさんに乗せ、苦労話を聞きながら東京から西へ約五百キロを走る。麓の町のビジネスホテルに一泊し、翌朝山に入ったが、十年ぶりということもあってTさんがルートを誤り、原生林の中で迷ってしまった。遭難寸前でなんとか自力で下山し、翌日再チャレンジ。二回目は無事に目的の場所に行き着くことができた。かつてはけもの道のようなところを辿るしかなかったのが、ハイキング用の立派な道がつけられていたことで、かえってわかりにくかったのだ。

標高約八百メートルの山の斜面に、ぽっかりと穴の入り口が開き、そこから闇がのぞいていた。入り口の脇にビニールの風呂敷に包まれた四角い箱が置かれている。

「プラスチック爆薬ですよ。十年前に使った残りです」

Tさんはこともなげに言ったが、一瞬冷たいものが背筋を走った。聞けば雷管いかんもいっしょに入っているという。下手に触ると手首が吹っ飛ぶくらいではすまない。

ヘルメットにキャップランプを装着し、軍手をはめてTさんの先導でおそろのおそろの内部に進入する。中はひんやりとして、洞穴独特のカビの臭いが鼻をつく。

高さが十分ではなく、中腰か場所によっては両手をつき頭から潜り込まなければならなかった。一部、落盤によって通路の半分が塞がっているところもあった。ゆるく右にカーブして、入り口から十五メートルほどでドーム状の小部屋のようなところに行き着いた。

「ああっ！」

先を進んでいたTさんが突然大声を上げた。予想外の事態が起きていたのだ。そこからまっすぐ下へ向かう立て坑が、朽ち木と土砂で完全に埋まっている。いや、教えてもらわなければ、そこに穴があること自体がわからない。周囲に組まれた坑木が腐食して崩れ落ち、それに土砂がかぶったのだろう。見上げると、ドーム状の天井の岩肌は、いつガラガラと崩落してきても不思議はない状態だ。

「こんなはずじゃなかった。すんなり下の段に行ければ仕事は早いんだが」

Tさんはしきりに悔やむ。立て坑の深さは五メートルほどだという。ここを通過できれば、写真で見せてもらった天井の高い半月形の空間と、そこから斜坑を経て、丁寧に削られた感じの最奥部に到達できるらしい。

帰り道はあまり言葉を交わすことがなかった。Tさんはさすがに年齢のせいで疲労の色が濃く、ぼくのほうはといえば、疲労に加えて自問自答を繰り返していたからだ。Tさんから引き継いで調査をやる価値は十分にあるとは思うものの、その能力が自分にあるかどうか。もちろん独りでできるわけがないし、チームを編成するにしても、これまでいっしょにやってきたメンバーの中には、声をかけられそうな者がいない。麓の町から現場まで毎日通って作業することは無理だから、現地キャンプとなる。一回につき最低三泊は必要だろう。トンネル内に坑木を組み、立て坑の土砂を掘り出すには最低五人は必要だ。前後のことも考えると、勤め人だったら定期的は何日かは休暇を取ってもらわなくてはならない。アウトドアに慣れていて体力があり、しかも土木のノウハウももっている。そんな者が知り合いにいないだろうか？

(「いたいた!」)

その人の顔が浮かぶまで、さほど時間はかからなかった。約二時間かけて下山したときには、ぼくの頭の中で「Tプロジェクト」の構想がほぼ組み立てられていた。

「協力者に心当たりがありますので、返事はもうしばらく待ってください。その人に現場



を見てもらったうえで、できるといふ確信がもてたらお引き受けします」

その程度の答えでも、Tさんは満足げだった。とにかく百パーセント断念しなくてもすむメドがついたからだろうか。

東京に帰るとすぐに、ぼくは東大阪市に住む二名良日ふたなよしひさんに電話をかけた。ご無沙汰のお詫びもそこに用件を伝えると、見込みどおり反応は上々だった。

二名さんは一九四三（昭和十八）年愛媛県の生まれで、ぼくより四歳年上。そのときは五十四歳だったはずだ。早稲田大学探検部OBで、八年間の在学中に、後に作家となる西木正明氏（本名鈴木正昭）や船戸与一氏（同原田建司）らと数々の冒険を敢行し、レジエンドとなっている。長く在学することになったのは、シルクロードでのフィールドワークを続けていたからだ。学問のためというより、ほとんど趣味だったような気がする。その八年目の途中で早稲田はエジプトの調査をやることになり、指導教授から現地へ行くよう指示されたのだが、二名さんは

「八年でちゃんと卒業したいので、もう帰らせてください」

と懇願して帰国、代わりにエジプトへ行くことになったのが吉村作治氏である。

大学卒業後、二名さんは東京で「野外塾」という子どもを対象にしたアウトドア教室を開いた。ぼくはそのころに、雑誌の企画への協力を依頼したのがきっかけで親しくなり、その後、塾の指導者の一人に名を連ねることになった。雑誌の企画では沖繩の国頭村でのサバイバルキャンプや、四国の四万十川ゴムボート下りなどをやった。

二名さんは奥さんの地元の大阪に移ってからは、「関西アウトドアスクール」を設立して、相変わらず子どもを楽しませるのか自分が楽しんでいいのかわからない生活が続いているのは知っていた。余談になるが、後にテレビ東京の人気番組だった「TVチャンピオン」の「無人島王選手権」の常連となり、タイトルも手にしている。

二名さんはトレジャーハンティングの経験はない。それなのにぼくが協力を求めたわけは、キャンプの達人であるのもちろんのこと、とくにツリーハウスづくりを得意としていたからだ。木を切り出し、トンネルの中に坑木を組み、安全を確保しつつ奥へ進んでいく。そのプロセスに達人の技術がきつと生かせるはず。それに、大阪から現地までは、JRの特急列車を利用すれば一時間半もかからない。ぼくがよく知っている長男の「いづき君はじめ、若くてパワフルな指導者たちが何人か来てくれるだろう」

それからひと月半ほど後、相手がちょうど同じ県内へ行く予定に合わせて、その目的地で合流し、一泊したあと山に入った。キャップランプの頼りない明かりの中に浮かび上がる直径二メートルにも満たない窪み、すなわち、埋もれた立って坑の上部と、そこに覆い被さるようなドーム状の天井を代わる代わる眺めたあと、二名さんはつぶやいた。

「なんとかやれるでしょう」

その言葉を聞いて、ぼくの腹は決まった。



「相当厳しい作業になると思いますが、ぼくはこれを修行だと思ってやるつもりですよ」  
そのひと言にインパクトを受けたと、後に二名さんは述懐している。「ようしオレも」という気になったのだそうだ。「修行」という言葉は、そのとき自然に出てきたが、体力的にも精神的にも、これまでのどの発掘より厳しいものになることは確実だったし、楽しむどころではないかもしれないと思ったからだ。だが、修行僧や一流のアスリートたちは、苦しい修練を喜びに変えることができる。もちろん、覚悟があつてこそだ。ぼくは彼らに倣おうとした。二名さんもいわば本能的にそのことを受け止めてくれたのである。

また、目的のものが見つかったときには、けつして大きさでなく、ある意味国を背負うことになる。覚悟以上の強い気持ちが必要だった。

こうして「Tプロジェクト」はスタートした。そして、第一次発掘調査を実施したのは、その年の九月のこと。

ぼくは夜明け前に独り車を運転して東京を発ち、午前十一時にJR敦賀駅で大阪からの一行を出迎えた。二名さん以下、長男の一気君（当時二十二歳）とその友人二人（男性）、そして大学の探検部でもにケービングをやっているという女子学生の計五人が揃った。人選はもちろん二名さんに任せただが、最高の陣容といつてよかった。いちばん驚いたのは女子学生で、小柄なうえに肩を脱臼しているにもかかわらず、自分の体と同じくらいの大ささのザックを背負っていた。

初回だから荷物が多いのは仕方がない。シュラフなどの個人装備のほかに、米その他の食料、テントに鍋、ヤカン、ガスバーナーコンロと燃料、ライト類。トンネル内で使うラントン用の単一乾電池は二十本以上用意したから、それだけでも相当な重量だ。また、現場にはあいにく水がない。途中の水場で十五リットル入りのポリタンクを満タンにする。

ぼくはそのほかに工具類を担いでいた。折りたたみ式のショベル、ハンマー、石のみ、ペンチと太い針金など。二名さんはひと抱えもあるマニラ麻のロープ一卷きとブルーシートを数枚持参してくれた。それらは事前に連絡を取り合つて揃えたものだ。

荷物がなければ片道一時間半程度で行き着くところを、たびたび休憩を入れたせいで、結局二時間半はかかっただろうか。ヘトヘトになってキャンプ予定地に倒れ込む。若者たちは半ズボンだったので、足をブヨにやられて掻きむしり、血を流している。しかし、トンネルを見たとき、その目が輝いた。あとで聞いた話だが、彼らは現場に着くまではこの一件をまったく本気にしていなかったらしい。ちよつとおもしろそうだし、山登りやキャンプは大好きだから、ほとんど遊びのつもりでついでにきたのだった。それが、現場を目の当たりにすると、たちまち自分たちが冒険物語の主人公になったような気がして、めまいさえ覚えたという。

長期戦になるのは覚悟していたから、まずはキャンプサイトの整備に時間を費やした。五、六人用の大型テント二張り分のスペースを確保し、その中間に大きめの石を組み合わせてかまどを作り、太めの木の枝をロープで縛つて作った椅子とテーブルを周りに配置する。さらに、少し離れた斜面には、雪の重みで根元の曲がった立木を利用したトイレ。早くも二名さんの真骨頂が発揮され、長期滞在も可能な実に快適なキャンプサイトが出現した。また、住空間とその上方約二十メートルにあるトンネルの入り口までの「通勤ルート」も、階段を作ったりして歩きやすくした。頭上にはヤマボウシの赤く色づいた実が、食べきれないほどなっていた。

二日目の午後からいよいよトンネル内部の作業に入った。入り口から立て坑のあるドームまでの通路の整備から始め、続いてドームの落盤防止の措置へと移る。工事をやりながら、次の回には何をどのような方法でやるか、そのためにどんな道具が必要かを考えた。

第二次発掘調査は約二カ月後の同年十一月。本格的に立て坑の土砂の掘削を開始し、三日間で二メートルは掘り下げた。直径二十センチ以上はある木を切り出し、ロープをかけて四、五人がかりで斜面を引っ張り上げ、おおよその長さに切ったあとトンネル内に運び込み、寸法を微調整をしたうえで立てかけたり組み合わせたりする作業は、それまで経験したことのない重労働だったが、単なる穴掘りとちがって、構造物を造りあげていくというおもしろさがあった。

初年度はそれで終わり。十一月も中旬を過ぎると山には雪が降り始め、冬の間は深い雪に閉ざされる。休んでいる間に、ぼくはTさんと『埋蔵物発掘に関する委託契約書』を取り交わした。ともに「大げさかもしれない」と思いつつも、目的を達成すればそれこそ一大事だから、ちゃんとしておくにこしたことはない。それまでの話し合いの中で、先方から条件として出されていたのは、費用はぼくのほうで負担すること、事故等が起きた場合の責任もすべてこちら側が負うこと。こちらから提示したのは、発見したものは必ず公表して、所有権その他については法の下に明らかにすること、その二点を主軸にぼくが条文を作成した。

二年目は四月中旬にスタート。いきなり四日間、雨に降られっぱなしだった。それでも、広いブルーシートの屋根の下で、何不自由なく火をおこして食事を作り、睡眠をとって、作業もできるのだから、二名さんたちのキャンプテクニクは超一流だ。逆に雨の恵みもある。屋根にたまった雨水は、好天時にはできない手洗いに使えるし、最終的には炊飯にも利用した。

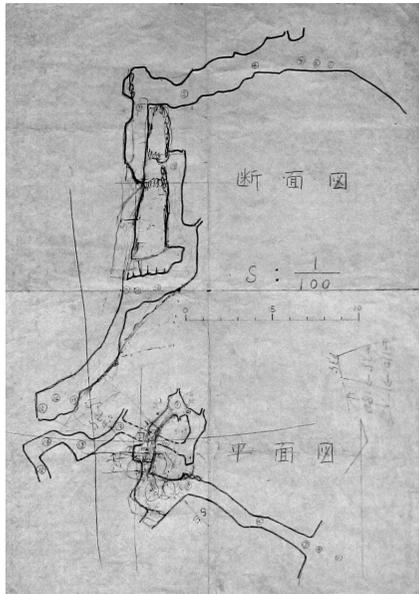
おかげで作業も思い通りに進み、三日目に立て坑の底にたまっていた土砂が下方の空間になだれ落ち、ついに貫通した。第一ステージクリアだ。Tさんから聞いていた通り、立て坑の下に続く半月形の空間は、幅は狭いものの高さは十分で、まっすぐ立って歩けるほどだった。そこから右方向に三メートルほどの距離の斜坑を下りると、その先が二またに分かれていて、いずれも五メートルほどで行き止まりになっていた。突き当たりの岩壁を入念に調べたが、さらに奥に続いている様子はない。ここまでのトンネルのどこかに、隠し部屋があるということだろう。

まず、輝緑凝灰岩という緑色の岩の層を探すことから始めた。入り口から近いところは同じ岩石の層が続いているが、奥へ進むにしたがって、茶色と緑色の岩盤が入り組んでいて、よく観察すると方々に断層が見られる。

断層の境目に沿って、白っぽい粘土層が詰まっているところもある。そういう自然にできた地層と、人間の手による工事の跡を見分けなければならない。十分とはいえない明かりの中で入念にチェックしていく。

それにしても、たいへんな工事をやってくれたものだ。もしほんとうに、このトン

断面図と平面図のトンネルの設計図



ネルのどこかに莫大な財宝が眠っているとしたら、それは一時的に隠したのではなく、永遠に地下に封じ込める、つまりこの世から消してしまふことを意図したのだろう。そうとしか考えられない。昭和十九年、戦況が危うくなってきたとはいえ、はたしてそこまでする必要があったのか。しかし、いま自分が身を置く空間が、人工的につくられたものであることには疑う余地がないし、ほかの目的でこんな工事をしたとも思えない。どこかに半世紀以上にわたって封じ込められたものがあるのならば、貴金属類は別として、美術工芸品は本来鑑賞のために作られたものであるはずだから、ぜひとも目の目を見せてやりたい。「Tプロジェクト」の最大の目的はそれなのだ。

埋もれていた立て坑が貫通した時点で、一度金属探知機を使ってみたかった。前々から日本トレジャーハンティング・クラブの仲間で、滋賀県の大津市で探知機の通販会社を営むひしおかのりゆき脇岡則幸氏に声をかけていた。少し前に別の場所で見せてもらった「ジェミニIII」という宇宙船のような名前の探知機は、深さも三メートル以上に対応できるようだし、折りたためば小型のアタッシュケースくらいで軽量コンパクト。現場で使えるはずだ。

同年五月の第四次調査に、その脇岡氏に同行を要請する。あまり山登りが得意ではなく、ふだんはコンピュータの前でしか仕事をしていない、自称「引きこもり」の脇岡氏が、第一休憩所の手前で心臓がバクバクして危うくギブアップというところを、なんとか尻をたいて目的地まで到着させ、落ち着いたところでトンネルの中へ導いた。彼もこんな場所は生まれて初めての体験とみえて、今度は膝がガクガクしていたが、「時価二千億」と聞いて命も惜しくなくなったか、指定した場所でちゃんと機器を操作してくれた。その結果、たった一カ所だけが確かな金属反応を得ることができた。半月形の空間から二メートル下りた、中段のステップ状のところ、器械がうなりを上げたのだ。実際には「うなり」というのは大げさで、携帯電話の着信音よりは少し大きい程度の、いわゆるビーブ音だが、閉鎖空間でもあるし、期待してはいたもののはたして鳴ってくれるかどうか不安もあったので、誰もが音を大きく感じたのである。

しかし、このときはまだ、その場所に金属反応があることの意味について、深くは考えていなかった。なるほどという思いと、目的が達成できそうだという感触を強くもつのは、翌月、依頼人のTさんを現場に伴ったときのことだった。

老人でも苦勞なく立て坑を降りられるようなステップができあがったら、依頼人に現場に来てもらうのは、当初からの計画どおり。十数年来ずっと気にかかっていた場所があるというので、はっきりここだとポイントを示してくれたほうが、こちらとしてもやりやすい。喜寿を迎える人とはとても思えない元気で、Tさんは我々と行動をとみにした。いよいよ決着がつくという期待感に心を満たしているのがわかった。

すでに工事着手から十カ月がたち、このとき第五次の調査を迎えていた。Tさんはトンネルの奥に入ると、まるで林のように立ち並ぶ坑木を目にして、驚くとともに安心した様子だった。素人集団に仕事を任せただけについて、内心不安だったにちがいない。また、「考えていたより半年くらい早いですよ」とも言った。工法、進捗状況ともに、とりあえずは花丸印をもらったと考えていいだろう。

「思ったとおりだ。ここ、ここですよ。ほら、岩が白っぽいでしょう。周りは茶色か緑色

なのにここだけが。もしかしたら粘土と石灰を混ぜた三和土（たたく）のようなものかもしれない」  
最奥部までゆっくり時間をかけて観察し、引き返して来るまでほとんど無言だったTさんが、プロが持つ探鉱用のハンマーであちこち引っかけ回したあと、そういつて指し示したのは、立て坑を下りてすぐの半月形の空間の床だった。我々は最奥部への通路としか見ていなかったところだっただけに、意外に思ったが、よくよく見れば不自然に思える白い岩である。靴で踏みつけ、泥で塗りつぶされていたからわからなかったのだ。さらによく観察すると、格子状に深い溝のようなものが確認できる部分がある。レンガ二個分くらいの岩を規則的に並べ、そのすき間に詰め物をして固定したのではないだろうか。また、その床面の左側の壁と接する部分は、手前から奥まで裂け目が走っている。つまり、床だけがほかとは異質なものでできていて、分離しているように見えるのだ。そして、その白い岩は、ぼくたちが斜坑と呼んでいる部分へつながっている。約二メートル下に幅十センチ程度の段があり、さらに一・三メートル下がって、最奥部の横穴と同じレベルに達している。

となると、金属探知機の反応が大きな意味をもってくる。ビーブ音が鳴ったのは、二メートル下の段のところ。Tさんの言うとおり、白い岩盤が人工物だとすると、そのど真ん中に金属を孕はらんでいるということになる。岩の厚みを考慮すれば、真上から反応がなかったのは、けっして不思議なことではない。もちろん、Tさんには事前に探知機の反応のことを知らせていたので、それも自信を深める材料となったのだろう、興奮気味にこう言った。

「この下に宝蔵がありますよ。上から岩をはがしていくのがいちばんいい方法のようですね」

いよいよ、単なる土木作業から財宝探しに移行できる。ぼくも気持ちが高ぶった。二名さんと助っ人の若者たちの顔もいっそう輝きを増している。

それから二日間、ぼくたちは白い岩盤の上を重点的に調べた。しかし、作業内容がこれまでとはちがうし、予想もしていないことだったので、道具が不十分だった。溝を深く削っていくには、平鑿（ひらたがね）のようなものが必要である。ある程度進めたところで打ち止めにして、次回、必要な道具を揃えて出直すことにした。

同年十月の第六次調査には新顔が二人揃った。一人は関西アウトドアスクールの指導者の男性。もう一人は大分県別府市役所に務める公務員の若い女性だ。二名さんが大分県で無人島キャンプを実施したときの、地元の世話役だったらしい。語学が達者な

人為的な工事のあとに見える箇所（右上）



ので、ふだんは海外からの留学生の面倒をみているのだが、二名さんは彼女のこと「ゴッド姉ちゃん」と呼んでいた。別府から夜行フェリーで大阪へ着き、その足で来たというからたまげた。色白の美人で、見かけはお嬢さん風なのだが、どうしてどうして、泥にまみれながら最前線で掘ったり土砂を引き揚げたりする様子は、なるほど「ゴッド姉ちゃん」だった。

岩を削る作業は実に辛抱が必要だった。遅々として進まない。しかも、結果は見込みがなかったようだ。格子状の亀裂を深くえぐっていけば、そのうちにレンガ二個分くらいの岩が次々にはがれてくると考えていたのだが、格子状の亀裂はさほど深いものではなく、全体が大きな岩盤をなしていた。ならば、宝蔵への入り口はどこにあるというのか。

「中段のあたりか、あるいは白い岩の根元のあたりを調べるしかないでしょう」

ぼくの考えに誰も異論を唱えなかった。今回はTさんは同行していない。首都圏の自宅でじっと朗報を待っている。

それから八カ月後の二〇〇〇（平成十二）年六月、東京から新メンバーも同行して仕切り直しの第七次調査。関西アウトドアスクール育ちでプロカメラマンの女性は、二名さんの推薦もあり、現場写真をちゃんと撮ってもらいたかったから、いいタイミングでの参加だった。もう一人はぼくの姪の友人の男性で、前年の夏の多摩川の花火大会のときに、我が家で河原に用意した観覧席にほかの友達と一緒に見物にやってきたのだが、大学時代アムフト部で鍛えたごっつい体を見て、その働きに期待してぼくがスカウトした。

ただ、その時点からの作業にはいろいろと障害があった。第一に、岩盤の根元のほうを調べようとする、上面を削った際に落としたりした土砂がじゃまになる。奥の横穴にはそれを処理するスペースはなく、やむなくロープに吊した布バケツに入れて立て坑を引き揚げ、さらに横穴を通してトンネルの外に出すという、非常に体力を消耗する作業が必要だった。

それよりもっと深刻だったのは、穴の底の空気の状態だ。ロウソクの炎がだんだん小さくなっていく。酸欠というのは恐ろしいもので、空気中には二十一パーセントの酸素が含まれるが、それ以下になると頭痛や吐き気などが起こり、十パーセント以下になると突然意識を失うことがある。立て坑が坑木で狭くなり、空気の流通が悪くなっていることが原因だろうか。穴の底で失神する者が出たらいへんだ。狭い立て坑を引き揚げて外まで運び出すのはとうてい無理な話。ほとんどその場でおだぶつである。いつも携帯用の酸素ボンベを数本用意してはいたが、それは気休めでしかなく、一度倒れてしまったらもう役に立たない、自力で吸うことができないからだ。

そこで、ゴミ袋を使って、たまった二酸化炭素を排出することにした。穴の底で六十リットル入りの袋の口を大きく広げ、空気を詰めて口をクリップで塞ぎ、ロープで立て坑を引き揚げたあと、何人かがリレーをして運び、最後はトンネルの外の斜面の下へ向かって袋の口を開ける。土砂に比べれば軽いか



ら、その点は楽ではある。しかし、誰も見ていないからいいようなものの、事情を知らない第三者の目には、この作業がどのように映っただろうか。

ゴミ袋作戦の効果は絶大で、三袋分の空気を排出するとロウソクの炎が元どおりの大きさになった。それでも安心できず、一日に一度、十袋分を運び出した。

ミレニアムイヤーの二〇〇〇年のうちに、なんとしても隠された財宝を発見し、世の中に発表して元々あった国に返還する計画だった。もうあと一回か二回、現場に通えばその目的を果たすことができる感触があった。しかし、それを阻む出来事がぼく自身の身に降りかかった。

同年八月末のこと、外出から帰宅途中、自宅の数メートル手前で、後ろからよそ見をして走ってきたバイクにはねられて、救急車で病院に運ばれることになってしまったのだ。意識はあったようだが、記憶がないので何が起こったのか本人はまったくわかっていない。幸いだったのは自宅の前だったということと、途中で偶然息子と出会って一緒に歩いていったということだ。五十三歳になって生まれて初めての入院、そして頭部の切開手術。症状は急性硬膜外血腫。頭部外科では定評のある病院の優秀な医師によって無事に手術は終わり、リハビリも入れて一カ月の入院を要するといわれていたのを十三日で退院したが、三カ月は後遺症の心配をしなければならぬというので、ついにその年は現場に行くことができなかった。自ら誓った二十世紀中の戦後処理はついに成し得なかったのである。

かといって、放置するわけにはいかない。ここまで来ているのだ。ゴールテープを切りたい。その気持ちを参加者全員が共有していたし、「御大」と呼んでTさんにすっかりなついた若者たちも、その願いをかなえてあげたいという熱意に燃えていた。

二〇〇一（平成十三）年の六月と十月、二度にわたって調査を敢行。相変わらず酸欠の恐怖と戦いながら作業を進めたが、結果が出るところまではいかなかった。

危険なのは酸欠だけではない。どうやらその山にもクマがいる。Tさんからは隣の山にはいるがここにはいないといわれていたのだが、ぼくたちは見てしまったのだ。いつも休憩所になっている中腹の平坦な場所にある大木には、根元から二メートルほどの高さに蜂の巣がある。その巣の入り口近くの幹に、大きくて深い生々しい爪跡があった。蜂蜜を求めて登ったツキノワグマであることは疑いようがない。

イノシシも、姿を見たことはないものの、自然薯を求めて掘った穴はやたらとある。大きなサルが山道を横切ったり、樹上でじゃれ合っていたりもする。また、夜中にはテナントの近くでシカが鳴く。まるで女性の悲鳴のような声だ。秋はとくにけたたましい。そのように自然豊かな場所だから、当然クマもいると思うものの、依頼人がいないというので信じていたのだが、実はちがった。よそでも近年クマの出没が増えているようだから、生息環境の変化は止められないのだろう。

二名さんは学生時代に知床半島を横断し、何度もヒグマと遭遇したそうだが、ここでの調査はそういった冒険行とはちがうので、できればクマには近づいてほしくないと言う。ましてや若者たちが恐れるのは当然のこと。ぼくももちろんこわい。財宝をこの目で見てみたいのはやまやまだが、命のほうはずっとだじだ。

そのようなわけで、実質的な発掘調査は、以後中断している。二〇〇二年四月と二〇〇五年十月に、東京から少人数で様子を見に行ったが、現場はますます危なくなっているこ

とがわかった。落盤防止のための坑木として入れた木はすべて生木だったため、幹から生え出したおびただしい数の気根が、まるですだれのように垂れ下がり、最も長い部分は五メートル以上に達して立て坑の床面に届いていた。凄まじい生命力だ。そのために、幹の養分を相当消費したはずだから、中がスカスカになっている可能性がある。これまでと同じ感覚で不用意につかまったり体重をかけたりすると、いっぺんに崩壊してしまい、着工前の状態に逆戻りすることだろう。

もし工事を再開するとなると、一からやり直しだ。テントをはじめキャンプ用の装備も使い物にならなくなっているし、キャンプサイトそのものも雑木が生い茂っているので、整備し直す必要がある。安全に進めるためには発電機や吸排気用のダクトファンなどあったほうがいい。いずれにしろ、相当な出費を覚悟しなければならぬ。

可能性を探っているうちに、どんどん時間が過ぎていく。Tさんと電話で話したのはもう五年も前になるだろうか。九十五歳という高齢のわりには元氣な声を聞くことができたので安心したが、その後、いい報告ができないこともあって、こちらから連絡をとることはなかった。

そして、相変わらずの几帳面さで、毎年欠かさずもらっていた年賀状が、三年前から来なくなってしまった。どうしても近況が知りたくなって、二〇二二年の年が明けて間もないころ、思い切って電話をかけてみた。携帯は持っていないはずなので家電へ。だが、誰も出ない。何度かけ直しても呼び出し音がむなしく鳴り続けるばかり。

願わくば、打開策が見つかり、ぼくたちが事を成し遂げ報告するのを待っていてほしい。ずいぶんと時間がかかって申し訳ない。ふと、Tさんの柔和な顔がまぶたに浮かぶ。その脇に、白い大きな犬が寄り添っている。



坑木からすだれのように垂れ下がる気根

